

ドイツ語の固有名詞について (II)

谷 崎 英 男

3. ドイツの家族名 (続)

ドイツの家族名の第二のグループをなすものは、その出身地ない住居地に由来する家族名である。本来からいうならば故国にいれば住居地の名前をえ、他国へ出たときにはその出身地の名前をえる訳であるから、この二つは区別されるべきであろうが、今日ではこの区別はもはやすっきりとはできないので、ここでは両方を一緒にあつかうことにする。

このような家族名のもっとも古いものは疑いもなく、一族あるいは家族の所有地から取られたものである。この種の命名の方式は南ドイツの高級貴族のあいだに指摘することができるが、中世の最盛期の騎士階級出身の詩人、たとえば、ハインリッヒ・フォン・フェルデーケ (Heinrich von Veldeke), ヴォルフラム・フォン・エッセンバッハ (Wolfram von Eschenbach), ハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue), ヴァルター・フォン・デア・フォージェルヴァイデ (Walther von der Vogelweide) などのように、後には下層の貴族のあいだにも行われるようになった。そしてさらには市民階級や農民たちにもうけつがれるようになった。たとえば13世紀の詩人であるゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg) やコンラート・フォン・ヴェルツブルク (Konrad von Würzburg) は市民階級の出身である。

上例によっても分るように、個人名に住居地あるいは出身地が付加されるときには、しばしば前置詞の von (ラテン語やフランス語では de, オランダ語では van) や, zu や auf などによって結びつけられたのである。たとえば von

Falkenstein, von und zum Stein, vom Berge, zu der Linde, auf der Mauer などのように。従って von はよく貴族階級のしるしであるとされているが、元来はそうではなく、貴族階級のしるしとなったのは17世紀以来のことである。オランダでは van は今日でも市民階級のなかで行われている。たとえば Ludwig van Beethoven の van Beethoven は vom Rübenhofe (砂糖大根農場の。ラテン語の beta から) の意味であり、van Dyck は vom Deich (堤防の) という意味である。またレンブラント (Rembrandt) は父親がライン河の支流に水車小屋をもっていたので van Rijn (=vom Rhein) (ライン川の) と称していた。ドイツで von が貴族の称号になったときには、市民階級を貴族に列する際に、von Müller とか、von Kurz とか言語学上は無意味な名前も生じたのである。

市民階級や農民の居住地の名前には前置詞と冠詞のついたものが多い。たとえば am Bach (=an dem Bach) (小川のほとりの), vom Berge (山の), im Hof (農家の), zur Mühle (水車小屋の), am Tor (門のそばの), von der Heide (荒地の), beim Born (泉のそばの), unter der Weiden (牧場の下の) のようである。時には (特にスイスにおいて) これらの名前は一語として書かれ, Ámthor (=am Thor), Ímhof (=im Hof), Índermühle (=in der Mühle), Vontobel (=von Tobel) (谷間の), Żurflüh (=zur Flüh) (絶壁の), Żurlinden (=zur Linde) (ぼだいじゆの) のように、前置詞の部分にアクセントがおかれることもあった。

出身地を示す名前はまた前置詞を省略することによって家族名になることもあった。たとえばルターの論敵であったヨーハン・エック (Johann Eck) は元来はヨーハン・マイヤー (Johann Meier) であったが、エック出身のためにそう呼ばれたのであるし、ルターの初期の時代の友人であったアンドレアス・カルルシュタット (Andreas Karlstadt) はももとはアンドレアス・ボーデンシュタイン (Andreas Bodenstein) であったが、カルルシュタット出身であったの

でそう呼ばれたのである。このようにして Bamberg, Brandenburg, Coburg, Delbrück, Eger, Fulda, Eisenach, Mainz, Regensburg, Saalfeld, Sempach, Waldeck, Warburg などのように、地名が家族名として使われるようになった理由が明らかになるのである。

固有名詞の地名と同様に一般的な土地の名称である普通名詞も家族名となることがある。たとえば Acker (田畑), Bach (小川), Baum (木), Baumgarten (果樹園), Berg (山), Burg (とりで), Damm (堤防), Steinhaus (石の家), Fels (岩), Hof (農家), Friedhof (墓地), Kirchhof (墓地), Hohlweg (せまい道), Hügel (岡), Mühle (水車小屋), Stein (石), Steinbach (溪流), Viebig (=Viehweg 家畜の道), Wald (森), Uhland (ahd の uodal [世襲地] から) のようなものである。

ある地方あるいは居住地の出身はさらに接尾語の -er や -mann をつけることによって表現されることがある。ともに「……の人」を意味する。たとえば Bamberger, Bremer, Breslauer, Casseler, Erfurter, Frankfurter, Gießner, Haller, Hamburger, Meißner, Neuhauser, Prager などのごとくである。-mann で終る家族名も多い。Bachmann, Beckmann, Bergman, Buschmann, Feldmann, Hagemann, Hausmann, Holzmann, Teichmann, Waldmann, Wassermann, Winkelmann など。さらに Nordmann, Normann, Sudermann, Westermann, Ostermann, Oberländer などもっと広範囲な出身地を示す名前もある。

このような出身地に由来する名前よりもっと古いものは、民族あるいは国によって名前をつけることである。たとえばサクセン人のあいだに移住したフランク人は Frank(e), フランク人のなかのシュヴァーベン人は Schwab(e) とよばれる。このような個人名は13世紀以来世襲的な家族名として用いられるようになった。これに属するものには Böhm(e), Behm (ボヘミヤ人), Czech, Zech (チッコ人), Dähn, Dehne (デンマーク人), Deutsch, Engelmann (英

国人), Flemming (=Flamländer フランドル人), Franzos, Franzman (フランス人), Holländer (オランダ人), Lampert (=Lombarde ロンバルジャ人), Östreicher (オーストリア人), Pohl(e), Pohlmann, Pöhlmann, Pollak (=Pole ポーランド人), Reuß, Ruß (ロシア人), Schott (スコットランド人), Schweizer (スイス人), Türk(e) (トルコ人), Unger (=Ungar ハンガリア人), Baier, Bayer, Baiermann (バイエルン人), Fries(e) (フリースランド人), Hesse (ヘッセン人), Reimann, Riemann (=Rheinländer ラインランド人), Schlesinger (シュレージエンの人) などがある。

もう一つ居住地に由来する家族名として家の名前から発生したものがある。ドイツでは18世紀まで家に名前をつけるのが普通で、この慣習は今日でも薬局や飲食店などには家号として残っている。このような家の名前は最初はたいていその家のある土地の特徴によってつけられたが(たとえば「バラの木」のある家が zum Rosenbaum, 「ぶどうの木」のある家が zum Rebstock というように), 後にはもっと多様なものになった。たとえば zum Kranz (花輪), zum Spiegel (鏡), zum Engel (天使) などのように, 玄関の上にとりつけられた家の標識がその名前を具象的に表わすこともしばしばあった。従ってこのような多くの家の名前がその家の所有者あるいは居住者の家族名になったということは, きわめて当然なことといえよう。ドイツの家族名のなかに多くの植物の名前や動物の名前のほかに事物の名前が見出されるのはこのためである。これに属する家族名としては次のようなものがある。

Blum(e) (花), Lilie (ゆり), Rose (ばら), Rosenblüt(e) (ばらの花), Rosenstock (ばらの木), Dorn (いばら), Klee (クローバー), Obst (果物), Wiese (牧草地), Birnbaum (なしの木), Nußbaum (くるみの木), Fichte (ドイツとうひ), Linde (ぼだいじゆ), Kiefer (松), Tannenbaum (もみの木), Busch (やぶ), Laub (葉) (以上植物名); Bär (熊), Bock (おすやぎ), Eichhorn (りす), Hase (うさぎ), Hirsch (おじか), Igel (はりねずみ),

Kalb (子牛), Katz (ねこ), Kuh (めうし), Lamm (子羊), Löw(e) (ライオン), Maus (ねずみ), Ochs (おうし), Reh (のろしか), Rind (うし), Stier (おうし), Wolf (おおかみ) (以上動物名); Adler (わし), Elster (かさぎぎ), Eule (ふくろう), Falke (たか), Gans (がちよう), Geier (はげたか), Habicht (おおたか), Hahn (おんどり), Henne (めんどり), Kranich (つる), Rabe (からす), Sperber (はいたか), Sperling (すずめ), Storch (こうのとり), Taube (はと), Vogel (とり) (以上鳥の名); Hummel (円花蜂), Mücke (蚊) (以上虫の名); Hering (にしん), Krebs (かに), Lachs (さけ), Zander (とげうお) (以上魚の名); Engel (天使), Hammer (つち), Kranz (花輪), Krone (冠), Krug (つぼ), Kreuz (十字架), Morgenstern (明けの明星), Schere (はさみ), Schlegel (棍棒), Spiegel (鏡), Spieß (槍), Stern (星) (以上事物名)。

もちろん以上のような家族名は必ずしも家の名からきた訳ではなく、時には後に述べるようにあだ名からきたと考えられる場合もありうることである。

次にドイツの家族名の第三のグループをなすものは身分や職業や役職名に由来するものである。これらの名前はドイツにおける中世の社会構造や職業の構成をうかがわせてくれるので、文化史的には特に興味深いものである。これらの名前の大部分は中世における都市の繁栄と産業や職業の分化とともに生じたのであるが、多くの職業がそのための設備を必要とするために父から息子へと相続されたという事情によることが多い。また役職もしばしば世襲制であった。地方では今日でも子供を父親の職業に従って Bäcker-Franzl (パン屋のフランツル), Schneider-Hans (仕立屋のハンス) などと呼ぶことは行われていることである。このグループの家族名は舟乗りの職業を除いて (ドイツで海に面している北海沿岸では呼び名からきた家族名が支配的であったからである) ほとんどすべての職業に渡っているが、手工業に関するものがもつとも多い。Becker (=Bäcker) (パン屋), Müller (粉屋), Schneider (仕立屋), Schu-

ster (くつ屋), Schmidt (かじ屋), Weber (織工) などが代表的なものである。

しかしながらこの Becker の派生形である Beck, Backer (フリースランド地方), Beckers, Beckermann, Beckering, Bäckerling, Backert のほかに、パン屋という職業の内部での著しい分化を示す色々な合成語の名前も生れている。たとえば Weckbecker (Weck は細長い上等の小麦パン), Kuchenbecker (Kuchen はお菓子), Semmelbecker (Semmel は巻パン), Stollenbecker (Stolle は白パン), Weißbecker (= Weizenbecker, Weizen は小麦), Kohlenbecker (Kohle は石炭), Pfannenbecker (Pfanne はフライパン), Platzbecker (Platz は広場) などがある。

同様に単一形である Müller, Möller, Moller, Mühlner, Mülner, Milner, Mölner, Mölter, Mülter, Milder, Mühler, Möhler, Müllers, Möllers などのほかに多種多様な合成形がある。たとえば Mühle⁽¹⁾ の種類に従って Sägemüller (製材所の主人), Schneidemüller (木びき所の主人), Ölmüller (製油所の主人), Grützmüller (ひき割り製造人), Roßmüller (馬力によって動く Mühle の主人), Windmüller (風車小屋の主人) などがあり、また Mühle の環境によって Angermüller (牧草地の Mühle の主人), Bergmüller (山の Mühle の主人), Werthmüller (島の Mühle の主人), Bornmüller (泉の Mühle の主人), Stadtmüller (町の Mühle の主人), Bruchmüller (沼地の Mühle の主人), Furtmüller (浅瀬の Mühle の主人) のような合成形もあり、また Neu- (新しい), Grau- (灰色の), Schwarz- (黒い), Stein- (石), Hopfen- (ホップ), Hein- (Heinrich の短縮形), Kunzemüller (Kunze は Konrad の短縮形) のような合成形もある。

以上は Müller に関する名前をあげたが, Schuster についても同様である。中世高地ドイツ語の時代には Schuster (くつ屋) に対する名称は schuochsutære (=Schuhnäher くつを縫う人。ラテン語の suere より) と schuoch-

würhte (=Schuhwirker, Schuhmacher くつを作る人)であった。この二つの形からは Schuster, Schusterl, Schusterman, Schuester, Schoster, Schüster(l), Schiesterl, Schestl, Schust, Schuechter, Schochter, Scheuchzer, Schüchzer, Scheuchzger, Schauster, Schuchardt, Schuchert, Schubert, Schubart, Schuwert, Schober, Schuffert, Schaufert, Schuhmacher, Schmach, Schomaker, Schoemackers, Schaumäker, Schu(h)mann, Schuchmann など多数の家族名が作られている。また sutære からは Suter, Sauter, Sutter, Suttner, Süttner, Sütterlin, Suttermeister などができ、木ぐつの製造人は Holzschuher, Hultscher, Holscher, Hölcher, Hilscher などと呼ばれた。

一方、中世の都市における産業や職業の種々相を反映する家族名もある。Maurer (左官), Zimmermann (大工), Decker (屋根ふき職人), Schilefer-decker (スレート屋根ふき職人), Ziegler (れんが職人), Schindler (こけらふき職人), Tischler (家具師), Wagner, Wagener, Wegener, Wegeler, Rademacher, Stellmacher (車大工), Schlosser, Schlösser (錠前師), Glaser (ガラス職人), Seiler (なわ作り人), Färber (染物師), Gerber (皮なめし工), Sattler (馬具師), Riemenschneider (皮ひも製造者), Kürschner (毛皮職人), Keßler, Kessler (いかけ屋), Spengler (ぶりき職人), Taschner (かばん製造人), Steinmetz (石工), Steinhauer (石切り人), Brauer, Bräuer (醸造人), Koch (料理人) などがそれである。このような家族名の中にはもうとっくに滅亡した職業からきているものや、古くなって今では使われなくなった語根を含んでいるものもあって、今日ではその根源を理解しにくいものもある。たとえば Breiser (mhd. の brisen [ひもでしめる] から。組ひもの職人), Armbruster, Armbröster, Armster (石弓作り), Bogner, Bögner, Böger, Beger (弓作り), Pfeilsticker, Pfeilstöcker (Pfeil [矢] の幹を作る人), Schilter, Schilder, Schiller (楯を作る人) などがある。金属職人としてはそのほか Nagler (釘製造人), Nadler (針製造人), Gabler (フォーク製造人), Löffler

(スプーン製造人) などがある。Menger, Menge, Meng, Menk, Mengersなどはラテン語の mango (商人) から ahd. の mangari を経てできたもので、商人を意味する。また Winkler と Winkelmann は町の片すみ (Winkel) で小さな商売をやっている人の意味である。よくある家族名である Bucher, Buchner, Büchner, Buchmann, Büchmann などは書記のことである。

このような職業名の中には方言からきているために、特定の地方だけにしか通用しないものもある。たとえば Töpfer (陶工) のことは南ドイツでは Hafner, Haffner, Häfner, Hefner などといい、西部ドイツでは Euler, Eulner, Eiler(s), Auler, Öllner, Üllner などといい、低地ドイツでは Potter, Pötter, Püttner, Püttmann などといい、ライン川およびモーゼル川の流域では Gröber, Kröber, Kröper などというのである。また Fleischer (肉屋) を意味する語からきている家族名もドイツ全体に渡って数が多く、Metzger, Metzler, Fleischmann, Fleischhauer, Fleischhacker, Knochenhauer, Schlachter, Schlächter, Sulzer, Selzer, Salzer (salzen [塩づけする] から。塩づけにした肉をうる人。) Selcher, Silcher (selchen [くん製にする] から。) Kuttler, Kittler, Kittel (Kuttel [内臓] から。) などがある。

農民に由来する家族名には Bauer, Neubauer (低地ドイツ語では Niebuhr), Neumann (低地ドイツ語では Niemann, 中部ドイツ語では Naumann), Lehmann (小作人) などがあり、また Ackerman (Acker は田畑), Drescher (打穀する人), Pflüger (すきで堀り起す人), Hofer, Höfer (農場主), Hübner, Hufner, Hüber, Huber, Hieber (1フーフエの耕地の所有者), Rubner, Rieber (Rübe [かぶら] を作る人), Höpfner, Höppner (Hopfen [ホップ] を作る人), Wingerter, Wimmer (ぶどう栽培者) などにもこれに属する。

そのほか田園生活に関する職業名としては Gärtner (庭師), Hirt (牧人), Herder または Harder (家畜の所有者), Schäfer, Schäffer, Schefer (羊飼

い), Förster, Forster, Förstemann, Forstemann (山林所有者), Schütze (射撃人), Weidmann (猟師), Jäger (かりうど), Fischer (漁夫) などがある。

しばしば家族として世襲される役職名としては Richter (裁判官), Zöllner (税関吏), Mautner (税関吏), Münzer (貨幣製造人), Pfortner (門番), Torwart (門番), Stöcker (牢獄の監視人), Glöckner (鐘つき番), Küster (聖物保管係), Meßner (ミサの侍者), Kirchner (聖堂雇人) などがある。

また身分あるいは地位を表わす名称が家族名になる場合も多い。このような名称が家族名になったのは、多分その名称を最初にもつ人がそれに該当する高位の人と何らかの関係があって、同じような態度や振舞をしたが、あるいは中世に人気のあった劇の中でそれにあてはまる役を演じたかによるのであろう。これに属するものとしては Kaiser (皇帝), König (王), Fürst (領主), Prinz (皇子), Graf (伯爵), Landgraf (方伯), Markgraf (辺境伯), Burggraf (城主), Ritter (騎士), Knappe (小姓), Junker (貴公子), Marschall (主馬頭), Hofman (低地ドイツ語では Hoffmann) (廷臣), Edelmann (貴族), Vogt (代官), Papst (法王), Bischof (僧正), Pastor (牧師), Abt (僧院長), Mönch (修道士) などがある。

さらにもう一つ次に扱うあだ名に由来する家族名への過渡的な段階ともいえるべきものがある。これはいはば間接的職業名ともいえるべきもので、人の職業を間接的に特徴づけることによって生じたものである。たとえば仕事に使われる材料によって Wagner (車大工) のことを Krumbholz (曲材), 道具によって Schuster (くつ屋) のことを Knieriem (ふんばり屋), 作業工程によって Schneider (仕立屋) のことを Stich (一縫い) などと呼ぶ類である。

ドイツの家族名の第四のグループはその名前の最初の所有者の特性に基づく家族名である。つまりあだ名や異名 (Übername) に由来するすので、その名前の所有者が普通の名前の外に (über seinen gewöhnlichen Namen hinaus)

もらったものである。このような種類の命名には人間の嘲弄ぐせが加わって、Übername は Spitzname (原意は Spottname. spotten [嘲笑する]) や Schimpfname (schimpfen [ののしる] から) になる場合が多い。あだ名になるのは名詞や形容詞が多いが、語のかたまりや慣用句になることもある。以下その例をあげてみよう。

まず第一にあげられるのはその名前の所有者の著しい肉体的な特質である。Groß, Grosse(r), Grote(n) (低地ドイツ語), Großmann (いずれも groß [大きい] から), Lang(e), Langer, Langemann (lang [長い] から), Kurz (短い), Klein(e), Kleiner (klein [小さい] から), Lüttmann, Luttmann, Lütke mann (低地ドイツ語 lütt [小さい] から), Hoch, Hohman (hoch [高い] から), Dick (太った), Dralle (drall [がっちりした]), Fett(e) (肥満した), Stark(e) (強い), Dürr (やせぎすの), Hager (やせた), Mager (肉のない), Dünnemann (dünn [やせた] から), Blasse (blaß [蒼白な] から), Hübschmann (hübsch [かわいらしい] から), Schön(e), Schönherr, Schöne mann (schön [きれいな] から), Säuberlich (清潔な), Blank (びかびかする) などがそれである。

また頭 (Haupt, Kopf) や首 (Hals) や毛髪 (Haar) の状態に関係するものとしては Breithaupt, Breitektopf (breit は広い), Großkopf, Dünnhaupt, Kurzhals, Hartnack, Harnack (hart [堅い]+Nacken [首]), Schwarz(e) (黒い), Dunkel (黒ずんだ), Weiß(e) (白い), Witte, Wett, Witt (低地ドイツ語), Weißhaar, Wittkopf, Roth(e), Rother, Rohde (赤い), Fuchs (赤毛の人), Braun(e) (褐色の), Grau(e) (灰色の), Graumann, Griese (mhd. gris [灰色の] から), Gelb (黄色の), Kraus(e) (ちぢり毛の), Kraushaar, Krauskopf, Krull, Krooll (mhd. krol [巻き毛の] から), Kahl(e), Kahler (はげた), Strube (乱れた), Bart (ひげ), Breitbart, Spitzbart (とがったひげ), Rotbart (赤ひげ) などがある。

足や脚や歩き方に関係したものもある。たとえば Langbein (長い脚), Hohlbein (くぼんだ脚), Krummbein (曲った脚), Schmalfuß (細長い足), Breitfuß (幅の広い足), Kuhfuß (め牛の足), Kalbfuß (子牛の足), Rehbein (のろしかの脚), Hühnerbein (にわとりの脚), Lahmer (びっこの人), Schleicher (こっそり歩く人) などである。

肉体的な特徴と並んで精神的あるいは道徳的な特性が命名の基準になることもある。たとえば Beste (best [最良の]), Bange (心配した), Bangemann, Biedermann (bieder [正直な]), Bös(e) (悪い), Edel (高貴な), Ehrlich(er) (誠実な), Ehrsam (尊敬すべき), Feige (卑怯な), Feine (上品な), Frech (あつかましい), Freundlich (やさしい), Fröhlich (楽しげな), Fromm(e) (敬虔な), Geist (生氣), Gleisner (偽喜者), Glück (幸福), Gnade (恵み), Grimm (憤激), Gute (喜良な人), Gutermann, Herz (心), Höflich (丁寧な), Klug(e) (利口な), Kühn(e) (大胆な), Kühnemann, Liebe (親愛な), Liebermann, Lustig (楽しげな), Mut (勇気), Sauer (気むずかしい), Sorge (心配), Unglaube (不信仰), Weise (賢い), Wolzogen (=wohlerzogen) (育ちのよい), Zorn (怒り) などである。

あだ名の中には動物の名前に関係したものも多い。これは名前の所有者がその動物に似ているという事情もあろうし、またその動物の所有者あるいは愛好者であったということもあろうし、また前述のように家の名前からきていることもあるであろう。以下にその例をあげてみよう。Löwe (ライオン), Bär (熊), Wolf (狼), Fuchs (きつね), Hirsch (雄鹿), Roß (馬), Ochs (雄牛), Kalb (子牛), Schwein (豚), Vogel (鳥), Adler (わし), Falk (たか), Storch (こうのとり), Fink (あとり), Sperling (すずめ), Spatz (すずめ), Strauß (だ鳥), Fisch (魚), Frosch (かえる), Käfer (かぶと虫), Fliege (はえ), Mücke (蚊), Floh (のみ), Wurm (虫) など。

またある種の装備あるいは衣類を愛好していたために、それがあだ名になっ

たとえられる場合もある。これはある意味では前述した間接的職業名に関係しているということもできよう。たとえば Blaurock (青い上衣), Gehrock (フロックコート), Kurzrock (短い上衣), Langrock (長い上衣), Langelmantel (長いマント), Weißmantel (白いマント), Lederhose (皮ズボン), Langhut (長い帽子), Weißhut (白い帽子), Stiefel (長ぐつ), Eisenhut (鉄かぶと), Harnisch (鎧), Pfeil (矢), Speiß (槍), Hammer (槌), Schlegel (打つ器具) などである。

また名前最初の所有者の愛好した食物または飲物をあらわしていると思われるあだ名もある。たとえば Bohne(豆), Bratfisch(魚フライ), Gansfleisch (が鳥の肉), Hafermehl (オートミール), Käse (チーズ), Kalbfleisch (子牛の肉), Leberwurst(レバーのソーセージ), Rindfleisch(牛肉), Schweinebraten (豚の焼き肉), Schweinefleisch (豚肉), Speck (ベーコン), Zuckermann (Zucker [砂糖]), Bier (ビール), Biermann などである。

自然現象あるいは時の概念からあだ名が作られている場合もある。これらの多くはその所有者の生誕の日または時点を示しているのであろう。たとえば Stern (星), Morgenstern (明けの明星), Schönwetter (上天気), Sonnenschein (日光), Nebel (霧), Ungewitter (雷雨), Regenbogen (虹), Sturm (嵐), Wind (風), Donner (雷鳴), Lenz (春), Sommer (夏), Herbst (秋), Winter (冬), Hornung (2月), Mittag (正午), Montag (月曜日), Donnerstag (木曜日), Freitag (金曜日), Sonntag (日曜日) などである。

さらにもう一つ種類の違ったものとして文章名がある。命令の形をとったものが多く、Luginsland (=Lug ins Land 見張台), Vergißmeinnicht (=Vergiß mein nicht 忘れな草), Waghals (=Wage Hals 向うみずの人), Stehaufmännchen (=Steh auf, Männchen おきやがり小法師), Gottseibeius (=Gott sei bei uns 悪魔) などの類である。このような文章名は著しく皮肉あるいは風刺的な性格をおびており、中世期においては特に愛好され、15お

よび16世紀において最盛期を迎えたが、その後は余り用いられなくなった。

いくつかその例をあげると、追いはぎ貴族や傭兵の時代を想起させる家族名として Haltaufderheide (=Halt auf der Heide), Schauinsland (=Schau ins Land), Griepenkerl (低地ドイツ語=Greif den Kerl), Jagenteufel (=Jage den Teufel), Schlagintefel (=Schlag den Teufel), Schlagintweit (=Schlag entzwei), Schüttenhelm (=Schütt den Helm), Schüttenspeer (=Schütt den Speer 英語の Shakespeare) などがあり、また大食漢や大酒飲みは Füllbauch (=Füll den Bauch), Füllschüssel (=Füll die Schüssel), Rämenap (=Räum den Napf), Drinkuth (低地ドイツ語=Trinkaus), Trinksaus, Hauenkrug (=Hau den Krug), Leerenbecher (=Leer den Becher), Neigenbecher (=Neig den Becher) などと呼ばれ、けちな人間は Küssenpfennig (=Küß den Pfennig), Sperrenbeutel (=Sperr den Beutel), Sperrensack (=Sperr den Sack), Sparbrot (=Spar Brot), Schabenkäse (=Schab den Käse) などと呼ばれた。

最後にドイツで外来語系の形をとった家族名について述べておこう。周知のごとく家族名が成立した頃に公けの記録の言葉として使れていたのはラテン語であった。それ故書記がドイツ語の名前をラテン語に翻訳することがしばしば行われた。従ってずっと以前から Bäcker, Fischer, Jäger, Kaufmann, Müller, Schmied, Weber の代りにラテン語の形である Pistor, Piscator, Venator, Mercator, Molitor, Faber, Textor が用いられていた。しかしながらラテン語やギリシャ語の名前が流行になったのは16および17世紀の人文主義者たちのせいであり、今日行われているラテン語およびギリシャ語の家族名の大部分はこの時代に生れたものである。その表われ形は色々で、単に翻訳したもの、たとえば Agricala (Bauer), Gallus (Hahn), Lavator (Wäscher), Magnus (Groß), Migirus (Koch), Melanchthon (Schwarzerd), Pastor (Hirt), Rex (König), Vietor (Korbmacher) などもあり、また勝手に模造したもの、た

たとえば Albinus (Weiß), Argyräus (Silbermann), Avenarius (Haberman), Dryander (Eichmann), Fabarius (Bohnmann), Gryphius (Greif), Mylius (Müller), Mesomylius (Mittelmüller), Meander (Neumann), Olearius (Ölmann), Vulpius (Fuchs) などがあり, また音声上の同化作用によって Fleck が Flaccus に, Grote が Grotius に, Lucke が Lucanus に, Luz が Lucius に, Klaus が Clusius に, Krause が Crusius に, Kurz が Curtius になるようなこともある。

また最近新聞誌上に見られる英語ないし米語へ同化した形も多数ある。たとえば Eisenhower (=Eisenhauer), Ford (=Fürth), Hoover (=Huber), Pullmann (=Pulvermacher), Richmann (=Reichmann), Rockefeller (=Neuwied 近郊の Rockenfeld から), Sanger (=Sänger), Snyder (=Schneider), Steinway (=Steinweg) などである。

4. ドイツの地名

人名と並んで固有名詞の第二のグループをなすものは地名である。地名も序論でふれたように, 狭義の地名には居住地の名前が入り, 広義の地名には国や山や河や湖や森や平原の名前が入るが, それが作られる原理は大体において同じなので, ここでは狭義の地名だけに限定することにする。

地名の成立は原則的には人名の成立とまったく同じで, 普通名詞が固有名詞に変化したものである。最初の居住者がその居住地を Au (沃野), Berg (山), Tal (谷), Werder (中州), Bach (小川), Brunn (泉) などという地形の普通名詞でもって呼んだか, あるいは活動の場所として Feld (耕地), Haus (家), Hof (農場), Heim (住家), Dorf (村) などでもって呼んだ訳である。そして居住地が増加するに従って区別をつける必要が起り, このような基礎語の上に, 原住地をもっとくわしく特徴づける規定語がつけ加わるようになったのである。このような規定語としては形容詞や名詞が用いられたが, 特に人名, つま

りその居住地の所有者あるいは創設者の名前がよく用いられた。このようにしてたとえば Schönau, Eichenberg, Ruppertsdorf などという合成の地名が生じたのである。

ところで地名はある居住地の場所を表示しようという欲求から生じたのであるが、インド・ヨーロッパの言語では地名をあげるのには独自の格、すなわち位置格(Lokativ)というものがあつたが、これはゲルマン語の時代にはすでに与格(Dativ)のなかに吸収されていた。古代高地ドイツ語では与格の地名と並んで一般に前置詞(zu, in, auf, bei)が登場しているのはその影響であり、前置詞は中世高地ドイツ語では次第に姿を消すが、今日でも Andermatt (=ander Matt=Matte 牧草地), Zermatt (=zer [<ze der] Matt) などの地名にその面影をつたえている。また時には前者詞が名前そのものと融合して Zusenhofen (<ze Uzzenhofen), Züttlingen (<ze Uttlingen), Zettelsdorf (<ze Etlisdorf) などとなる場合もある。

与格の形が認められる地名としては Altenburg, Hohenstadt, Weißenfels などがあるが、これらは中世高地ドイツ語の ze der alten burc (=zu der alten Burg) というような前置詞との組み合わせからできたものと考えられる。与格形はまた -hausen や -hofen で終る地名 (Mühlhausen, Dudenhofen), -dorfen や -stetten で終る地名 (Dorfen, Wettstten), -felden, -walden や -landen に終る地名 (Hochfelden, Churwalden, Bonlanden) などにも残っている。

次に発音上の問題に移ると、地名も他のすべての語と同じようにドイツ語の音声学的な発達を経ていることはいうまでもない。従ってアクセントのない母音は e に弱まったり、あるいは省略されたりした。たとえば Franconofurt は Frankenfurt になり、後には Frankfurt になった。また中世高地ドイツ語の î, û, iu は地名においてもそれぞれ ei, au, eu になっている。たとえば -wiler, -hûsen, -riute に終る地名は -weiler, hausen, reute になっている。さらに合

成の際に、最初の成分自体が合成語であるときは、この最初の成分の単語の二番目の部分は脱落しようという原則は地名についても有効性をもっており、Heidelbeerberg から Heidelberg が、Kirchbachhalden から Kirchhalden が、Salzachburg から Salzburg ができている。

合成語の地名では規定語でばかりでなく、基礎語もまた種々な変形をこうむっている。たとえば基礎語の -heim は北ドイツでは -um (Bochum=Buchheim), 西部ドイツ特にモーゼル川流域では -em (Bachem, Dalem=Bachheim, Talheim), 南ドイツ特にバイエルンでは -ham あるいは -kam (Moosham, Piesenkam), バーデンではしばしば弱まって -en (Aufen<Uffheim, Bretten<Bretheim) になっている。

ところで言語の歴史と言語のにない手の歴史とのあいだには密接な関係があることはいうまでもないが、この関係が地名におけるほどはっきりあらわれる領域は少ないであろう。ドイツ民族はその歴史の発展とともに、居住地の命名に多数の基礎語を加えてきている。

従ってある一定の地域に単一の地名のタイプが集まっていれば、そこからその土地への植民の時代が推論できる訳である。その意味で地名の基礎語の歴史は植民の歴史の一部といえることができる。そこでドイツ民族の植民が行われた三つの主要期に応じて、地名もその基礎語に従って次のような三つのグループに分けて考察するのが適切であろう。

- (1) ゲルマン民族の移動時代に由来する名前。植民地はもっぱら植民者たちの移動団体にちなんで命名された。これに属するものはまず第一に -ingen (これは基礎語ではなく、接尾語であるが) で終る植民者の名前で、南ドイツに特に著しく広がっている。
- (2) はぼ西暦 800 年頃までのメロヴィング朝のフランク王国による征服時代に由来する名前。この時代の地名には基礎語が植民の様式 (たとえば Heim, Haus, Dorf, Stadt など) を示すとともに、規定語がしばしば領主

の名前を含んでいるのが特徴的である。初期植民時代に生れた地名である。

(3) 後期植民時代に由来する名前。征服した土地を封建君主へ分配した後は、余り豊かでない森林や山岳地域が開拓されなければならなかった。このような不毛な地方と強力に対決した時代には基礎語としては地形の状態あるいは環境に関するものが主として選ばれた。これに属するものには -berg, -feld, -bach, -see, -wald, -grün, -eiche, -reut, -furt などに終る名前がある。

ドイツの地名でもっとも古い層に入るのは前記の(1)にある植民者の名称である。これは大部分ゲルマンの個人名からきており、その短縮形に接尾語の -ingen をつけて作られたものである。-ing は所属あるいは血統を表わす接尾語で、-ingen はその複数 3 格の形である。従って Sigmaringen (ahd. Sigmaringi) は ‘bei den Leuten des Sigmar’ (ズイグマルの一族のところに) の意味であり、Hechlingen は ‘bei den Leuten des Hachillo’ (ハヒロの一族のところに) を意味する。この形は特にシュヴァーベンやアレマン地方に多く、バイエルン地方では中世後期以来、Freising, Pasing, Straubing などのように -ing になっている。

-heim で終る地名も広く流布しているが、これは主としてフランク王国の権力伸長の時代に出来たものである。この基礎語はもともと「家 (Haus), 一軒の農夫の家屋敷 (Einzelgehöft)」を意味したが、もっと大きな住居地をいうこともあった。Germersheim, Hildesheim, Schopfheim などのように、-heim に終る地名は南西ドイツに多い。前期植民時代に由来する地名には、さらに次のような基礎語に終る地名がある。

-hausen (複数 3 格), 低地ドイツ語では -husen および -haus: Mühlhausen, Kellinghusen など。-hausen はしばしば -sen に短縮され、Bellersen のようになることがある。

-hofen (複数 3 格), -hof, 低地ドイツ語では hoop: Königshofen, Oberhof,

Ahrenschoop など。

-burg, -borg: Magdeburg, Göteborg

-stetten (複数3格), -stadt, -städt, -stedt, -statt, -stätt, -stett: Dornstetten, Immenstadt, Höchstädt, Helmstedt, Rastatt, Eichstätt, Althengstett

-dorf, -druf, 低地ドイツ語 -trop, -trup: Düsseldorf, Ohrdruf, Hattrop, Heckenstrup

-weiler (後期ラテン語の villare [農家の家屋敷, 分農場] から。フランス語の -villers に当る), そのほか -weiler, -weil, -wil の形もある。: Rappoltsweiler, Appenweiler, Bolschweil, Rapperswil

-gaden, -kammer, kemnat, -stuben, -zimmer(n) (Gaden は「一部屋だけの家」, Kammer は「寝室, 貯蔵室」, Kemenate と Stube は「暖炉のある部屋」, Zimmer はもともとは「木造建築の部屋」: Berchtesgaden, Stubenkammer, Badstuben, Neckarzimmern

-beuren, -beuern, -büren (ahd. の bur または buri [家・住居] から): Benediktbeuren, Grasbeuern, Amelsbüren

-kotten, -kot, -katen (低地ドイツ語 kot(e), オランダ語の kot [小屋] から): Hinterkotten, Meinkot, Bergkaten

-sassen, -sessen, -saß, -säß, -seß, -sis, -soos (sitzen [居住する] より): Waldsassen, Neusaß, Neusäß, Neusess, Neusis, Ottensoos

-siedel(n) (mhd. の sedel [居所] から): Wunsiedel, Einsiedeln

-sal (ahd. sala [貴族の館] から): Bruchsal, Neuensaal

-wig, -wich, -wick, -weich, -wieck (ahd. wih [村, いなか町] から): Kettwig, Katswich, Osterwick, Stefferweich, Braunschweig (<Brunswik), Osterwieck

-lar (住居, 居住地): Goslar (ゴーゼ川畔の居住地の意), Wetzlar

教会の施設や所有を示すものとしては次のような基礎語がある。

-zell, zella (ラテン語の cella [本来は貯蔵室, 後に部屋, 僧房): Badolfzell, Paulinzella

-klause (中世ラテン語の clusa [修道院] から): Bärenklause

-kloster (ラテン語 claustrum), -münster (ラテン語 monasterium), -pforte (ラテン語 porta): Neukloster, Kremsmünster, Schulpforte

-kirch, -kirchen, -kapel(le): Altkirch, Partenkirchen, Waldkappel

前期植民時代の法律関係を示す基礎語には次のようなものがある。

-bünde, -point, -paint (ahd. piunta, biunda から)。本来は特別な耕作のために留保された垣にかこまれた土地を意味するが, 開墾者の財産になった共有地の中の区切られた開墾地のことである: Hemsbünde, Hochpoint

-kamp, -gard (垣でかこまれた土地の意): Berkenkamp, Stuttgart

-eigen, -hub(e) (財産の意): Ruhamannsaigen, Huben

-erbe, -leben (世襲地の意): Sechserben, Aschersleben

9世紀になるとドイツでは新しい植民地獲得のための大運動がはじまった。人々の増加とともに開墾可能な土地に対する需要が増大し, 荒野や森林地帯に島のように横たわっていた居住地から新しい土地の開墾が行われた。その際には浅い森林地帯から深い森林へ, 低い地域から高い地域へと進み, ついには開墾者たちの斧は中部山脈の高地まで及んだ。

そのため部落の名前は必然的にその土地の形姿や状態を反映することになった。こういう意味では後期植民時代(9世紀から14世紀まで)に生れた地名はドイツの植民の歴史に重要な解明を与えるものである。

土地の形を示す基礎語としては次のようなものがある。

-berg, -höhe, -höchte, -hügel, -pard, -bühel, -bühl, -bohl, -boll, -hübel, -buckel (大かれ少なかれ自然に隆起している場所を意味する): Nürnberg, Friedrichshöhe, Steinhügel, Boppard, Eichbühel, Steinbühl, Homboll, Krummhübel, Katzenbuckel

高い丘陵，厳密に言えばその最上部を指す基礎語としては

-kopf: Schneekopf, Biedenkopf

-haupt: Breitenhaupt, Berghaupten

-first, -spitz(e), -brink, -eck, -stauf, -rück(en), -scheid, -schede, -hang, -halde(n), -leite(n): Schillingsfirst, Hainspitz, Schwarzenbrink, Saaleck, Donaustauf, Ziegenrück, Remscheid

その他土地の形に関連する基礎語としては -ort (二つの川口の間のとがった角にある居住地に対して), -horn (半島あるいは著しく突き出ている地面にある居住地に対して), -gehr(en) (くさび形の地面), -winkel (遠く離れた場所), -end(e) (終り), -rain (境界), -tal (谷), -tobel (小さな谷間), -grund (小さな水脈のあるせまい谷間), -eben (平野), -feld(e), -land(en), -gau (平原), -au (水郷), -werth, -werder (川べの低地) などがある: Ruhrort, Aichhorn, Buchengehren, Bärwinkel, Ostende, Langenrain, Georgenthal, Inntobel, Nesselgrund, Frohneben, Kranichfeld, Oberammergau, Ilmenau, Keiserswerth, Finkenwerder

そのほか居住地の地面の状態を示す基礎語もある。-fels (岩), -stein (石), -erd(en) (土), -lehm (ローム), -letten (陶土), -sand (砂地): Weißenfels, Königstein, Schwarzerden, Rotenlehm, Rothensand

さて居住地を選ぶ際にもっとも重要な役割を演じたものは水の問題であることはいままでもない。従って水についての基礎語は数多い。まず流水を示すものとしては -bach (小川), 低地ドイツ語では -beck, -bek(e), -ader(n) (小さな水流), -lauf (急流), -siepen, -siefen, -seifen, -seif (鉱水), -ffieß, 低地ドイツ語では -fleet, -ffiet (小さな水流), -brunn(en), -broon, -born (泉), -spring(en) (水源), -bad(en) (水遊び), -münde (川口): Ansbach, Hardenbeck, Brunnadern, Braunlauf, Heusiepen, Altenfließ, Heilbronn, Wiesbaden, Orlamünde

よどんだ水を表わすものとしては -see (湖), -wag, -wiek, -wyk (入江), -so(h)l (泥水だまり), -lache(n) (水たまり), -maar (円形の水のたまった盆地), -teich (池), weiher (小沼), -pfuhl (大きな水たまり) など: Weißensee, Kaltenwag, Schleswig, Dattensohl, Berlachen, Altenteich, Krotenpfuhl

沼地のしめった低地を示すものとしては -bruch, -brock, -brook, -broich, -fehn, -vonn, -siek, -brühl, -briel, -moor, -moos, -marsch: Breitenbruch, Herzebrock, Klingenbrook, Großefehn, Bannensiek, Bergerbrühl, Lichtenmoor, Todtmoos, Ostermarsch

居住地の草木の状態を示す基礎語もある。森林地帯を示すものとしては -wald(e), -forst, -hart (山の森), -schachen (森の先端), -holz, -wede, weeden (ahd. witu [森林] から): Greifswald, Kammerforst, Dürnhart, Holzschachen, Schönholz, Worpswede

やぶや灌木林を示すものとしては -horst, -busch, -loh(e) (ahd. loh から。やぶの意), -hain, -strut(h) (やぶでおおわれた土地), -stauden (やぶ), -strauch, strock, -struck, -dorn, -rohr, -schlatt (mhd. slate [あし] から), -ried (あし): Elmenhorst, Eichbusch, Lichtenhain, Haselstauden, Hagedorn

草の生えた平地を示すものとしては -heid(e), -wies(e), -wiesen, -matt(e), -grün, -anger (草地), -wang(en) (花の咲いている草原), -wunn (ahd. wunnja から。牧草地), -weide: Hohenheide, Metzzerwiese, Zaismatte, Furtwangen, Moosanger

その他木の種類を示す基礎語もある。-birk(e) (白かば), -buch(e) (ぶな), -eich(e) (かし), -lind(e) (ぼだいじゅ), -esch(e) (とねりこ), -espe (はこやなぎ), -hasel(はしばみ), -tann(e)(もみ), -ficht(e)(ドイツとうひ): Hohenbirken, Altenbuch, Schönlind, Hohenesch, Kirchhasel, Hohentann, Scönficht

土地対策から生れた地名では開墾に関する名前がもっとも多い。居住地として選ばれた地域の状態によって、色々な処置がとられたが、それらは次のよう

な地面の基礎語に反映している。

-hag., -hagen (ahd. mhd. hac hages から。垣をめぐらすこと。開墾の第一歩は地所を垣でかこむことであった): Grünhag, Lichtenhaag, Schwarzenhagen

-schwend(e), -schwenden, -schwand (ahd. mhd. swenden から。木を切り倒したり, 森を切り開くこと): Molmerschwende, Höhenschwand

-brand, -brunst, seng, -sang (やぶの多い地域を焼いて開墾すること): Neuenbrand, Vorderbrunst, Vogelsang

-reut, -kreut, -ried(t), -rod, -rode, -rad, -rath (ahd. riuti, mhd. riute から。開墾によって耕作できるようになった土地): Bayreuth, Wenigerode, Bernried, Buchenrod

また土地対策としては道路建設によって居住地を開くことや, 海岸地方では海に対する安全確保や地ごしらえが必要であった。道路建設を示すものとしては

-straß, -weg, -steig, -stieg(e), -pfad, -stalden (Stalde=けわしい道): Hochstraß, Altweg, Altensteig, Rennpfad, Oberstalden

人工の堀を示すものとしては -siel, -graben, -gracht, -kanal: Altensiel, Sulzgraben, Friedrichsgracht

海に対する護岸建設を示すものとしては -deich, -damm, -wall, -werb (堤防), -koog, -polder (これらの二語とも埋防にかこまれて排水工事をした沼沢地のこと): Norderdeich, Altendamm, Brunsbüttelkoog

農業を示すものとしては -acker, -breite (細長い形の耕地), -rache (休閒地), -esch (種のまいてある耕地): Langenacker, Rottebreite, Hohenbrach, Varesesch

以上は基礎語の問題であったが, たいていの地名は基礎語と規定語とからなっているので, 次に規定語の問題に移ろう。規定語はいうまでもなく地名のよ

り詳細な性格づけに役立つもので、大体において次の四つのグループに綜括される。

- (1) 個人名、民族名、地位の名称など。
- (2) ある場所を、その場所に内在する標識によってより細密に規定する言葉。
- (3) その場所の外にある目標を示す言葉。
- (4) その他の規定語。

原則としてどの基礎語も規定語として用いることができる。以下もっとも多く行われている規定語について簡単にふれてみよう。

等一のグループでは土地占有時代のもっとも古い名前においては個人名が特に頻繁にあらわれている。たいていの場合居住地の建設者または大地主の名前である。このような地名においてはずっと以前に用いられなくなって、もとの発音をほとんど想像させないようなものもある。たとえば Albertshofen < Albolteshofen, Ammerschweiler < Amelrichschweiler, Ansbach < Onoldsbach などである。

聖人の名前が規定語としてあらわれることもよくあることである： Anna-berg, Georgenthal, Johanneskirchen, Marienthal など。

民族や種族の名前ももちろん規定語としてあらわれている。たとえば Dietfurt, Detmold, Tieffenbach などがそうで、すべて ahd. thiot, mhd. diet (民族) からきている。その他種族の名前としては Frankenhausen, Friesenheim, Schwabhausen, Dänischenhagen, Frankfurt などがある。

地位あるいは職業の名種も規定語としてかなり見出される： Kaiserslautern, Königstein, Grafenhausen, Bischofsheim, Abtsdorf, Nonnenweiler, Bürgerwalde, Hirtendorf, Müllersdorf など。

第二のグループでは多種多様なものがみられるが、まず外形、色彩などによる規定語としては： Groß(en)dorf, Kleinburg, Breitenbach, Grünberg, Rothenburg, Weißenfels, Schönhausen

新旧によるものとしては：Althausen, Neumarkt, Neustadt

礼拝場を示すものとしては：Kapellendorf, Kirchberg, Klosterberg,
Münsterdorf

水際を示すものとしては：Bachhausen, Bornefeld, Seehausen

河岸を示すものとしては：Donaueschingen, Mainroth, Rheinau

陸地を示すものとしては：Bergheim, Felsberg, Sandberg, Steinbach

山を示すものとしては：Harzgerode, Röhnhof

荒野・草原・森・やぶを示すものとしては：Heidhausen, Wiesenbronn,
Waldhausen, Buschhausen

道や街道を示すものとしては：Wegscheid, Straßburg などがある。

第三のグループに入るものにはその場所となんらかの関係があるか、または
以前あった色々な自然現象の名称を含んだ規定語である。たとえば鉱物では：

Eisenach, Erzbach, Goldberg, Kalkreuth, Kiselbach, Kupferberg

木では：Baumgarten, Ahornberg, Apfelberg, Buchheim

穀物では：Dinkelsbühl, Haberloh, Haferfeld, Weizenbach

野菜や飼料を示すものでは：Erbshofen (Erbse [えんどう] から), Ampfer-
bach, Heudorf

花では (花の栽培はドイツでは中世になって広がったので、比較的新しい地名に多い)：Rosenberg, Veilchenthal

家畜では：Rinderfeld, Stierstadt, Kuhbach, Schafau, Ziegenhain,
Schweinfurt

その他の四足獣では：Bärenbach, Dachswangen, Eberbach, Fuchsmühl,
Wolfshagen

鳥では：Vogelsberg, Adlershof, Entenberg, Falkenhagen, Schwansee,
Taubendorf

その他の動物では：Froschgrün, Krebsfelde, Schlangenbad

その他として第四のグループに入るものに抽象的な概念を表わすものがある。これは比較的新しいもので、Freudenstadt, Hungerberg, Lustheim, Leiden-dorf, Liebenstein などがそれである。

以上基礎語と規定語について考察したが、その他基礎語のない各種の地名がある。まず第一にあげられるのは前述したような植民者の名称であり、これに -ingen (-ing) と -ung という接尾語がつけられて作られることは先に述べた通りである。基礎語のない地名はまた異った種族の住民のあいだに存在するある特定の種族の所属員の植民地が、その種族の名前の複数3格や zen (=zuden) を前につけて、zen Swaben のように呼ばれることから生じた。たとえば Bayern や Sachsen にある Schwaben や Elsaß にある Friesen, 中部フランケン地方にある Sachsen, Lothringen にある Hessen などがそうである。同様に Mönch (修道士) の居住地から München (zen München), Wald (森) の住民の居住地から Waldsassen が生じた。Bergern や Forstern (Berg [山] や Forst [森林] に住んでいる人たちに対して) などの地名も同様である。

もう一つのグループをなすものはいわゆる省略形の地名である。これは以前は基礎語があったのが省略されて個人名の2格形のみからなっているのでそうよばれるのである。たとえば Burkhardts や Helmbrechts などがそれで、Hans, Hof, Dorf などが省略されているのである。

また家族名にあったように文章名の地名も時々見出される。たとえば Siedlichfür, Schauinsland, Kehr wieder などがそれで、大ていは本来飲食店や鉱山 (Glückauf) の名前であった。

ドイツ語の名前と並んでドイツにはもっと古いドイツ語以前の地名が存在する。大別すれば三つに分けられ、一つはゲルマン人以前に今日のドイツの大部分に居住していたケルト人に発するものである。二番目は特に西南ドイツに見られるものでローマ人に起源をもつもので、三番目のグループはもっぱらエル

べ川とザーレ川の東方の地域にあるスラヴ系の地名である。

ケルト語からきているものとしては briga (山) という語が Bregenz, dunum (要塞, とりで) という語が Kempten (Kambodunum, cambos=曲ったの意), Thun (Dunum), Zarten (Tarodunum, Taros は人名) などに残っており, また Solothurn (もとは Salodurum) や Winterthur (もとは Vitodurum) にはケルト語の durum (城) という言葉が含まれており, ケルト語の magus (野原) という語は Dormagen (もとは Durnomagus), Marmagen (もとは Marcomagus), Neumagen (もとは Noviomagus) などに表われている。

ローマに支配されていた時代からは多くのラテン語の地名が出ている。大ていには要塞地, ローマ人の城郭や兵隊たちの集団地の名前である。バーゼル近郊の August, マインツ近郊の Castel, Koblenz (ラテン語の confluentes=モーゼル川とライン川の合流する所にの意味から), Köln (Colonia Agrippinensis から。クラウティウス皇帝の妃アグリピナに敬意を表してこう呼ばれた), Konstanz (ローマの皇帝 Constantinus によって創立), Trier (ラテン名 Colonia Augusta Treverorum, トレヴェラー地域に皇帝 Augustus によって作られた) などがそうである。また Tawern, Tewern, Zabern はラテン語の taberna (居酒屋, 飲食店) からきている。

スラヴ語系の地名にはドイツ人によってドイツ語化されたものが多く, Dresden, Leipzig, Plauen などがそうで, Bukow, Breslau, Schwerin, Görlitz, Delitzsch など, -ow, -au, -in, -tz, -itzsch などに終るものが多い。

5. 普通名詞としての固有名詞

最後に固有名詞が普通名詞として用いられる場合についての考察に移ろう。個人名という固有名詞がその本来の名前の所持者の特に際立った特質を示したり, またその名前の所有者に特徴的な習癖をもっていたり, そういう活動をしったりする人間一般に適用されることによって, 普通名詞になるということはよ

くあることである。同じようなことは民族名や国名や地名についてもあてはまる。

たとえばドイツ語の呼び名である Hans という固有名詞は英語の Jack ように、あまりに一般的な名前なので、普通名詞的な性格を帯びて、一般に軽蔑的の意味を伴って「大したことのない人間、男、やつ」の意味で用いられるようになった。Hans Wurst (道化役), Hans Narr (ばか者), Hans Liederlich (道楽者) などのようである。さらにはこの Hans が接尾語として Faselhans (おしゃべり男), Prahlhans (ほら吹き), Schmalhans (けちんぼ) などのように用いられ、動詞化されて hänseln となり「jemanden wie einen (dummen) Hans behandeln」(馬鹿なハンスのように取扱う→からかう)の意味で用いられるようになった。同様に Liese (Elisabeth の短縮形) や Trine (Katharine の短縮形) が alberne Liese (とんまな女), dumme Trine (ばかな女) のように用いられ、Stoffel あるいは Toffel (Christoph の短縮形) が「ぶこつ者」の意味で用いられ、Rüpel (Ruprecht の短縮形) が「無作法者」の意味で用いられ、また家族名では広く流布している Meier が普通名詞として「人間」の意味で用いられている。たとえば Angstmeier (小心者), Biedermeier (愚直者) などのようである。

次にもっと一般的なのは歴史上あるいは伝説上の人物の名前が普通名詞の機能を果す場合である。たとえばリジャの富裕な王 Krösus や、国際的な銀行の所有者である Rothschild に囚んで金持のことを、Krösus や Rothschild と呼んだり、賢い人間をイスラエルの賢王 Salomo(n) やアテネの法律家 Solon に従って呼んだり、長命な人を旧約聖書にある 969 才まで生きたという Methusalem の名で呼んだり、裏切り者を Judas, しつと深い人間を Othello, 世間離れした空想的な人物を Don Quichote, 女たらしを Don Juan と呼ぶようなものである。

また個人名から作られてはいるが、人物ではなく、事物や事柄を示す普通名

詞も数多い。たとえば Boycott (アイルランドの土地差配人 C. B. Boycott から), Gobelin (ゴブラン織) (15世紀のパリの染色家から), Grog (グログ酒) (考案者 Lord Vernon のあだ名から), Guillotine (ギロチン) (発明者といわれているフランスの医者 Guillotine から), Mansarde (2重勾配の屋根) (フランスの建築家 Mansard による), Nikotin (ニコチン) (フランスにたばこを紹介した Jean Nicot による), Silhouette (影絵) (あまり費用をかけずにできる。フランスの節約家の大蔵大臣 E. de Silhouette による) などがある。

また個人名が複合語の中に表われる場合も多い。たとえば Achillesferse (アキレスのかかと。弱点の意味で用いる), Argusaugen (アルゴスの眼。百眼の巨人アルガスの眼のような鋭い警戒), Damoklesschwert (ダモクレスの剣。常に身にせまっている危険。ダモクレスが宴会の席で一筋の髪の毛の毛で吊した白刃の下にすわらされたという伝説から), Ikarusflug (イカルスの飛翔。失敗に終る輝やかなしい飛翔。蠟づけの翼で父とともに、クレタ島を逃げ出したが、太陽に接近しすぎたので、蠟が溶けて海中に落ちた), Kainszeichen (カインの印。弟を殺したカインのような汚名), Sisyphusarbeit (シシュフォスの労働。果てしない労働。貪欲なユリント王のシシュフォスは死後地獄で罰として大石を山頂へ押し上げる仕事を課せられたが、石は山頂に近づくたびに転落するので際限もなくその苦役を続けなければならなかった), Tantalusqualen (タンタルスの苦しみ。欲望がすぐに満たされそうに見えながら永遠に満たされない苦しみ。ギリシャ神話によるとゼウスの子タンタルスは神々の秘密をもらした罰として地獄の湖水の中にあごまでつけられ、飲もうとすると水は退き、空腹に頭上の果物を取ろうとする手のとどかぬところに遠のいてしまったという), Uriasbrief (ウリアスの手紙。持参者に危険な手紙。旧約聖書によると、ダビデはヨアブにあてて「手紙の持参者を戦死させよ」と書いてウリアにそれをもたせた) などがそれである。

また普通名詞的な性格を帯びた個人名からでた派生語、名詞や形容詞もある。

たとえば Chauvinismus, chauvinistisch (シヨーヴィニズム。ナポレオンの熱狂的な崇拜者兵士 N. Chauvin に因む), Darwinismus, darwinistisch (ダーウィン主義), Marximus-Lenismus, marxistisch, lenistisch (マルクス主義, レーニン主義) などがある。

このような形容詞の多くは通例固定した結合形で用いられる。たとえば drakonische Strenge (極めてきびしいこと。アテネの立法家ドラコンに因んで), herkulische Kräfte (怪力。ギリシャの英雄ヘラクレスに因んで), homerisches Gelächter (呵々大笑, 高笑い。ホメロスの描いた神々の笑いに因んで), lukullisches Mahl (ぜいたくな食事。ローマの美食家の執政官クルルスに因んで), matrialisches Aussehen (勇ましい外見。ローマの軍神 Mars に因んで), panisches Schrecken (恐慌的な恐怖, パニック。ギリシャの森および牧畜の神パンに因んで。パンが現われると, 人々を烈しい恐怖にかりたてたといわれる), platonische Liebe (プラトニック・ラヴ。ギゾシャの哲学者のプラトンに因んで) などである。

また人名から派生した動詞としては lynchen⁽²⁾ (リンチを加える。アメリカのヴァージニア州の保安官チャールズ・リンチあるいは同州の判事ウィリアム・リンチの名に因んで), röntgen (レントゲン写真をとる。ドイツの物理学者ヴィルヘルム・コンラート・レントゲンに因んで), verbalhornen (改良を企ててかえって改悪する。リューベックの印刷者 Balhorn に因んで) などがある。

また国名や民族名が普通名詞として用いられている例も見出される。たとえば Apfelsine (オレンジの一種。Apfel aus China [中国からきたリンゴ] の意。中国の南部が原産地で, 中世には一般に Sina と呼ばれ, 15世紀にポルトガル人によってヨーロッパへもたらされた), Pfirsich (桃, ラテン語の malum Persicum [ペルシャのリンゴ] より), Magnet (磁石, ギリシャのテッサリア地方にあるマグネシアから), Kupfer (銅, ラテン語の aes Cyprium [キプロ

ス島から出た鉱石」の意), Spangrün (ろくしよう。spanisches Grün [スペインの緑] の意), Indigo (色のあい, indisches Blau [インドの青] から), Majolika (マジョリカ焼き [陶器], スペインの島の名から), Champagner (シャンパン, フランスの地名から), Sardine (いわし, イタリアのサルジニア島から), Krawatte (ネクタイ, クロアチアの兵士の首巻きから), Sklave (奴隷, ギリシャ語の sklavos [スラヴの奴隷] から) などがそうである。

多くの天然の産物や商品もその産地や製産地に因んで呼ばれることがある。たとえば Damast (どんす, 原産地のダマスカスから), Gaze (紗, 絹, ガーゼ, パレスティナの産地ガザから), Musselin (モスリン, イラクの都市モスルから), Tüll (絹のチュール, フランス原産地 Tull から), Korinthe (種のない小粒の干しぶどう, 古代ギリシャのコリントに因む), Kognak (フランスの原産地ユニャックに因む), Selterswasser (ソーダ水, 原産地ゼルタースから), Pergament (羊皮紙, 小アジアの都市ペルガモンから), Kolophonium (コロフォニウム, 小アジアの都市コロフォンに因む), Tarantel (舞踏ぐも, イタリアの都市タラントに因む), Landauer (ランドー馬車。ファルツ地方のランダウから。ランダウが包囲されたとき, ヨーゼフ一世がはじめて, ほろを真中から前後に折りたたむことができる馬車を用いたという), Kutsche (ほろ馬車, ハンガリアの製造地コーチから) などである。

注(1) Mühle というのは古い Handmühle (手ひきうす, 手ひき器) の代りに登場したローマの Wassermühle (水車場) を表わすラテン語の molina (フランス語の moulin, イタリア語の mulino, スペイン語の molino) からきたゲルマン語に共通な借用語である。そして「ある材料を砕くための装置」を意味する。従って「粉ひき場, 粉ひき機械」ばかりではなく, 粉にひく品物によって Getreida- (穀物), Farben- (顔料), Kaffee- (コーヒー), Pfeffer- (こしょう), Zement (セメント) などを接頭語とすることもあるし, 建築様式によって, Kugel- (球形), Glocken- (鐘状), Stein- (石造), Walzen- (円筒形), Rohr- (管形) などがつくこともあり, また動力によって Wind- (風力), Wasser- (水力), Dampf- (蒸気), Motor- (モーター) などがつくこともある。また砕くのではなく, 単に大まかに分割する工場

の意味で使われることもある。たとえば Sägemühle (製材所), Schneidemühle (木びき所), Ölmühle (製油所) のようである。

(2) リンチの語源については諸説あるがこの説は『岩波英和辞典』による。

参考文献

Wilhelm Schmidt: Deutsche Sprachkunde 1967

Theo Herrle: Reclams Namenbuch 1961

E. Wasserzieher: Woher

Linnarz: Unsere Familiennamen

Sturmfels & Bischof: Unsere Ortsnamen

H. Paul: Deutsches Wörterbuch 1968

Mackensen: Deutsches Wörterbuch

Der Neue Brockhaus

朝倉季雄: フランス文法辞典

国語学会編: 国語学辞典

樋口清之: 姓氏

中島文雄: 岩波英和大辞典